

メルロ=ポンティ哲学における感性的なものとロゴス

三宅 萌 (大阪大学)

20世紀フランスの現象学者モーリス・メルロ=ポンティ(1908-1961)がしばしば芸術に言及していたことは広く知られている。彫刻や音楽、映画にも増して彼が好んで言及するのは絵画であった。無論、哲学者としての彼の絵画への着目は、自他未分の根源的自然との「合一」を目指すといった、典型的にメルロ=ポンティ哲学へと寄せられるユートピア的な批判と重ねて理解されるべきものではない。

1959年に開始されたコレージュ・ド・フランスでの講義録によれば、古典的な哲学は、人間が現に置かれている状況や同時代的な人間(humanité)の状態によって「破壊」(*Notes des cours au Collège de France, 1958-1959 et 1960-1961*, 1996, 39)されるものである。こうした危機に際し改めて我々の現在を正確に捉え、新たな現実を作り上げていくための処方箋として、芸術が呼び出される。すなわち、メルロ=ポンティにおいて哲学と芸術とは、従来の思想・表現的伝統において未だ名指されていないもの、既存の制度内部では見えなくなっているものを、感性的なものを通して開示・表現・共有するという点で、その方向性を共有する。これは意味の生成(Sinngenesi)であるが、Benoistが分析するように、感性的なものそれ自体が主体となるような「ロゴスの生成」である(« *Rompre le silence de la phénoménologie* », *Levinas et Merleau-Ponty*, 2024, 259-270)。

本稿は、メルロ=ポンティ哲学におけるこの「感性的なものにおいて生成するロゴス」の内実を析出することを目的とする。この概念は、彼がとりわけ絵画を中心とする芸術に言及する折に頻繁に登場するものであり、着想源と考えられる以下の二つの議論をそれぞれ分析・統合することで、その性質と機能とを解明する。第一は、フッサール現象学である。『知覚の現象学』において既に「感覚的世界のロゴス」への言及が見られるが、視覚表象の歴史性と言語の歴史性との差異を取り上げる『シーニュ』、理念的なものを受肉させる感性的なものについて論じた『幾何学の起源』講義を通して、探究は更に推し進められることになる。しかし第二に、本稿は、彼が芸術を「非論理的本質(essence allogique)」を実現するものとして論じていることに着目する。この概念はマックス・シェラーに由来し、メルロ=ポンティの最初期の論文「キリスト教とルサンチマン」(1935)から登場するものであり、クロードルの「他なるロゴス」とともに、晩年の講義録や草稿まで取り上げられる。メルロ=ポンティのフッサール受容と合わせてこの概念を取り上げる。